＊・゜・＊・゜・＊・゜・＊

探偵会社アールズ

～クソ雑魚エージェント人格書き換え～

＊・゜・＊・゜・＊・゜・＊

【――我々、《悪の嚢》は歪んだ世界を正すべく、活動を開始した。
小賢しい忖度、無意味なレディファースト、あるいは女に媚び諂う軟弱な玉無しも同罪だ。我々は『男が女を支配する古き良き時代』を取り戻す。
女が男に犯されるための孔である事を今一度認識させ、全世界に徹底的な男性絶対優位の社会を構築する。この改革は痛みを伴うだろう。しかし――・・・】

大仰な身振りと尊大な態度。三十分近くにわたる冗長な演説。あまりの馬鹿馬鹿しさに、口から鬱々とした吐息が漏れる。理解に苦しむ言葉の羅列に、眉間の付近が熱を持ち始めていた。

（一体、自分は何を見せられてるんだ……）

タブレット端末の画面には、職場で視聴するには甚だ不適切な光景が映し出されていた。
悪趣味な紋章を掲げた、薄気味悪い覆面で顔を隠した男……その背後には、何十人もの女が笑顔で佇んでいる――『全裸』で、だ。

胸も、腰も、股間も露わに整列した女達は、一瞥するだけでも二十名を越している。
全員、片時もカメラから視線を外さず、両手で自らの乳首を摘んだ姿勢のまま、びくともしない。おおよそマネキンと勘違いしてしまいそうだが、彼女達はれっきとした人間であり――『この数ヶ月の間に突如として失踪した女性達』だ。
男が『犯行声明』と題したこの動画を全世界に公開したのが十日前。にも関わらず、メディアが大騒ぎしないのは、裸の女の映像があまりにショッキングだからか。彼女達がただの一般人という事実を鑑みれば、どうやら大規模な報道規制を敷いている事は私にも察せられた。

だが、世間は残酷だった。わずか数分でアカウントごと削除されたその動画が、今ではネットユーザーが複製したものが出回ってしまっている。消せば増える……正に火に油、といった様相だ。

（薬物？それとも閉鎖状態においての洗脳……？　少なくとも、暴行を受けた様子は確認できないけど……）

女性達は未だに発見されることなく、犯人と共にどこかにいる。逃げ出すことも、外部に助けを求めることもせず。その奇妙な事実が、この組織をより不気味なものにしていた。

「――スイレン先輩！ただいま戻りましたぁ」

唐突に、秋夜の冷気が開け放たれた扉から流れ込む。静まり返った事務所に快活な声を届けたその人影は、両手を顔の前で擦り合わせてから、扉を閉めた。

――赤星 梨々恋。『アプリコット』のコードネームを持つエージェント……

『リコ』が、明るい髪を揺らしてにへらと笑う。リスを思わせる愛らしい顔つきと、アイドル顔負けのプロポーションがブーツの上で煌々と輝く。

この会社で彼女が働き始めて以来、すっかり馴染みの光景だ。

「おかえり、リコ。何か収穫はあった？」

「駅チカに新しく出来たラーメン屋、すっごく美味しそうでしたよ！あと、この前の浮気調査のクライアントさんと偶然会って、懐石料理も食べてきちゃいました♪」

ぺろ、と舌を出すリコの顔が物語っている――「羨ましいですか？」と言いたげな挑発的な仕草に、私のこめかみに青筋が浮かび上がった。

「ほう？空腹の私を差し置いてそんなものを食べているとは、聞き捨てならないな」

……――もちろん、ただの冗談だ。

この仕事をしていれば、食事はどうしても不規則になる。食べられる時に食べる――「自分の虫養いは自分でする」のが、この会社のルールだった。
『探偵会社アールズ』……会社、といっても実態は小さな事務所だ。社員は私とリコの二人しか居らず、増やす予定もない。『蓮(Ren)』と『梨々恋(Ririco)』で『R's(アールズ)』と名付け、何があっても二人で乗り越えていこうと誓いを立てて今までやってきた。
相棒、親友、パートナー……公私を共にしても全く苦にならない。それどころか、一番心地いい距離感で接してくれる唯一無二の存在が、リコだった。私は彼女を単なる『同性の友人』以上に大切に想っているし、リコにとっての私がそうであれば、それは凄く嬉しい。

そんな二人の『仕事』は、世間が想像する普通の『探偵業』とは異なる。
警察が表立って動けない事件や事故、社会への大きな影響が懸念される犯罪組織への潜入調査、あるいは規模の大小を問わず違法な取引を秘密裏に調査し、犯罪者を引き渡す。法と規則のグレーゾーンに立ち、この国の秩序を守る。謂わば、正義の組織の『影』が、私達だった。

もちろん、危険は絶えない。だが、誰かがしなければならない。高い倫理観と道徳心を持ち、正義を執行する。何があってもぶれない意志の強さが求められる仕事だ。
そんな立場だからこそ――いつも明るく接してくれるリコの存在がありがたい。

「にゃはは、また今度あたしが連れていきますから、許してください♪ それより、今日は一つ、ビッグニュースがあるんですけどぉ……今、いいですか？」
「ビッグニュース？何かあったのか？」
「はい。そのクライアントさんが、偶然気になる動画を撮影できたって、見せてくれたんです。少し画質は悪いですけど、今、資料もまとめて先輩の端末にデータを送ったので見てください」

男の演説を流し終えたタブレットが、ポップアップとともに通知音を鳴らす。流石はリコだ。なんだかんだと、きちんと仕事をこなしてくれる。

「確認しよう」

筐体の画面に、丁寧に分類された資料が展開する。時系列順にまとめられた失踪記録、被害女性の個人情報、犯人のプロファイリング……実によくできた詳細なデータだ。
隣には目つきを鋭くしたリコが滑り込み、同じく画面に目線を落とす。《仕事モード》に入った時の目だ。部屋の空気が張り詰めていく。

「《連続少女失踪事件》……犯罪組織、悪の嚢。『女を本来あるべき姿に戻す』と称して、多くの女性を攫っている卑劣な犯罪集団……」
「現在の時点で被害者は二十八人。いずれも十代から二十代の女性ばかり。被害者の周りに目立ったトラブルの目撃情報はなし。失踪する動機も、被害者同士の共通点もありません。ただ……ものすごく美人な女性ばかり狙われてます」

リコが補足する。それは、先ほど男が演説していた映像の背後に映る女性達だった。なるほど、いずれも非常に整った顔立ちをしており、学生から既婚者まで、その経歴も様々だ。そんな女性達が――誰一人異議を唱えることなく、男に心酔した様子で、破廉恥なポーズを取ってカメラに自らの裸を見せつける――やはり、異常だ。

(正常な判断が出来なくなっているのは間違いない……だけど、これ程の人数が短い期間でこうも変わってしまうものだろうか?この男にそれほどのカリスマ性が有るとは思えないが……)

ポリガミーカルト(一夫多妻カルト)を彷彿とさせるが、女性の扱い方はより直接的かつ支配的で、歪なモノを感じさせる。

「これだけ大それた犯行をしておいて、犯人に繋がる情報は一切なし。それどころか、中には家族に書き置きを残して失踪した者もいる、と。まるで自ら望んで誘拐されたみたいだ、という声もある」

思わず出たため息が、手元灯の下に沈んでいく。
資料には、警察から入手した情報も含まれている。だが、そのどれもが決定打に欠けており、被害女性達の現在地は杳として知れない。
苦々しく告げた私に、身を乗り出してリコが反駁した。

「有り得ませんよ！先輩も見たでしょう。あの例の、女の人を奴隷みたいに扱った犯行声明の動画……」
「ああ。卑劣で、醜く、卑怯な集団だ。女性を跪かせて、笑顔で男性への性奉仕を誓わせる……外道だよ」
「『女は男に犯されるための孔』とか『男性絶対優位の社会』だとか、時代遅れすぎて、どうかしてますよ」

腰に手を当てるリコは、怒り半分、呆れ半分といった様子だ。なめらかな眉間に縦の筋が走り、本心からこの犯罪組織を軽蔑していることが分かる。もちろん、私も同じだった。

「罪のない女性にあんな事を言わせる危険な連中だが……何か手がかりはあったのか？」
「メールの一番下に、動画を差し込んでます。押してみてください」

言われたとおりに、メールの最下層へと一気に指を動かしていく。添付ファイルを示すアイコンと、動画を示す拡張子が小さく明滅する。指先で軽く触れると、雑音とともに画面がやおら動き出した。

「これは……！」

はたして、そこに映し出されたものに驚愕する。口から質問が飛び出すよりも早く、リコが頷く。映像の真偽は確認済み、という仕草のようだった。

「行方不明者の一人と良く似た女性が、一人で山奥へと入っていく姿を捉えた動画です。ここから先は集落もありません。むかし大事故を起こした化学工場の跡地があるだけで、今は立入禁止になっています」
「……そこに行く道は？」
「残念ですけど、ゼンブ私有地ですね～。色々悪い噂も絶えなくて、日中も誰も近づかないです」

衛星地図を確認しても、やはりこれといった居住区は存在しない。ただ一つ、何十年も前に大規模な化学物質漏出事故を起こした工場の跡地がぽつんとあるのみだ。

はたして女性がこんな所にひとりで向かう用事があるだろうか。繋がる道は草木で埋もれた廃道になっており、正しく『人里離れた』土地だった。

「……匂うな」

直感的に悟る。ここには、悪の嚢に繋がる何かが隠されている……それも、とても大きな何かが。

「はい。どうしますか？」
「手がかりが完全に消えてしまう前に、後を追うとしよう。リコ、悪いけど案内してくれる？それと、防護用のスーツに着替えておいて。嫌な予感がするわ」

『探偵会社アールズ』の裏の仕事――その予感に心がざわつく。側頭部をナイフの腹でちりちりと擦られているような、奇妙な感覚がちらつく。

（これは……危険な任務になるかもしれないな）

潜入と捜索、被疑者及び被害者の発見、必要とあれば犯行グループの制圧……武装の指示をとばした私に、リコが目を輝かせた。

「はーいっ！悪党退治っ♪悪党退治っ♪ スイレン先輩♪ あたし、準備してきますっ！」
「遠足じゃないんだぞ？……全くもう」

緊張感がまるで感じられない後輩に呆れながら、後に続く。

それが私達の悪夢の始まりだと、この時の私は知る由もなかった。

――――――――――――――――――――。

夜風が森をざわつかせ、獣の鳴き声が枝葉をくぐり抜けていく。
丸い月が空高くから私達を見下ろし、樹々の隙間から光が落ちてくる。
街中から一時間半の距離にある、高原地帯の一角。眼前には、件の工場が静かに、ふてぶてしくも姿を現していた。

「…ここが例の研究施設？ただの小汚い廃工場じゃない！」

月明かりの下で影を落とす建造物は、やはり修繕の手も入らなくなって久しいらしい。剥落した外壁に、蔦が巨大な迷路のように覆いかぶさっている。
想像よりも見窄らしく寂れた施設跡を、リコは忌憚なく評した。

「油断はしない方がいい。さっきも見つけたが、まだ新しい足跡がいくつかあった。ここに何か隠されてる可能性は極めて高い」
「でも、電気もついてないし、カメラみたいなのもないですよ。悪のアジトならちょっと不用心すぎません？」
「目立たないようにしてるだけかも知れない。とにかく、何か証拠があれば押さえて、危険な行動は慎むように。装備の確認はしたか？」

『自分達の身は自分達で守る』――――それがルールだ。で、あるからこそ、私達は武装を許可されている。
私の言葉に相棒がにこりと笑い、腰元に提げたホルスターに手を伸ばした。

「ばっちりです！にへへっ、スイレン先輩！あたし達が人気者になる日も近いですね！」

コンバットナイフと拳銃、そして拘束用の手錠と特殊警棒……重武装とは決して言えないが、私達が持てる最大限の装備であり、同時に闇雲に深入りしない意思の表明。決して表に出ないことが、『探偵会社アールズ』の不文律だ。

「リコ。私達の使命は有名になることじゃない。罪のない人を悪党から守ることだ」

「はぁい。怪しいヤツがいたら、あたしがガツンとやっつけてあげるんだから！先輩っ！今回も早く事件を終わらせて、パーっと飲みに行きましょ♡」

どこまでも楽観的な後輩に、いささか毒気を抜かれてしまう。けれど、考えている事は私も同じだ。今日の仕事も早く終わらせて、さっき言っていたラーメン屋に二人で繰り出そう。肉体労働明けの冷えた身体に、それはさぞ沁みるに違いない。

「そういう事は、無事に帰ってから言う言葉だよ。それじゃあ行こうか」
「はい！……ん？」

ふと。
丸い瞳をしたリコが勢いよく振り返り、きょろきょろと周囲を見渡す。何かを探す素振りに、つられて警戒の度合いを上げる。

「……どうした？」
「今、何か居たような気がして……んん、ごめんなさい、気のせいです。行きましょう！」

それが一体何なのか。同じく耳を澄ませ、目を凝らしても、怪しい人影はどこにも見当たらない。ただ吹き付ける風が、土の匂いを運んでくるだけだ。恐らくは、猿やムササビといった野生動物の類だろう。こんな場所では、人慣れしていない生物がいてもおかしくない。

工場を囲むフェンスはあちこち破れ、見張りもいない。駐車場のコンクリートはめくれ上がり、事故以来持ち主を失った車が何台も遺棄されている。
硝子の割れた框戸を見つけるのは容易だった。合鍵がなくとも、隙間から腕を差し込めば、いとも容易く解錠できそうだ。

（ここからなら……！）

足元、頭上、あるいはドアノブ自体への細工――――……クリア。ブービートラップ、クリア。赤外線探知機の類もない。ともすれば、ここは本当にただの廃工場で、アテが外れたのかという思考が頭を過ぎる。

（いや……私の勘が告げている。何かが――――【何か】がここにはある、と）

得体の知れない直感が、真っ暗闇の屋内へと導く。
足元に散らばる硝子を踏まないように気をつけながら、私達は屋内へと滑り込んだ。

＊＊＊

「……うぅ、ヤな感じ。埃っぽいし、カビ臭い……」

蚊の鳴くような声。持ち前の愛嬌は鳴りを顰め、半歩先を歩く私にだけ、気弱な呟きが漏れ聞こえてくる。
割れた蛍光灯、朽ちた棚、錆で原型をとどめていない金属機器。
ダクトには蝙蝠が棲みつき、小動物の糞尿の跡が生々しく残された廊下は、鼻が曲がりそうな臭いで満ちていた。

「どうやら私達が潜入したルートは、普段は誰も使ってないらしい。足跡も、人の気配もない」
「う～、あたし、人間の悪いヤツは平気ですケド、虫とかお化けとかダメなんですよぉ」
「虫やオバケより、人間の方がよっぽど怖いよ。もしも『悪の嚢』のアジトがここに隠されているなら、そこに辿り着けば……」

そう。実体を持たない幽霊より、人間はもっと悪質で巧妙だ。たとえば『悪の嚢』の組織がそうであるように。

（挑発的な映像を公開してなお尻尾を掴ませない男だ。ここに居たとしても、恐らくは相当慎重に隠れているはず……）

意図的な悪意ほど恐ろしいものはない。女性を貶め、妄言を吐き、捜査網を掻い潜るあの男を早く止めなければ、更なる被害者を生むだろう。使命感が、暗闇を歩く私達の足を突き動かす。

朽ちて外れた扉を潜り抜けた、その時だった。

「――誰だッ！？」

鼓膜が捉えた『異音』に、反射的に身体の重心を下げる。
機械特有のビープ音と、油圧式のモーターらしき独特の反響音。加えて、カチャカチャと耳障りな――百足の足音に似た【何か】。

瞬時にリコと背中合わせになり、全方位に隈なく視線を飛ばす。

誰も使わなくなり、電気すら通っていないはずのこの場所で、それはあまりにも不似合いな音だった。【何かが、居る】……それも、目の前数歩の距離の闇に潜んでいる。ナイフのグリップが手の中で鈍い音を立てる。
人ではない。だが、生物でもない。無機質な金属同士が擦れる怪音が、私達を取り囲む。

「なにこれ！？人間じゃない！？」
「くそ、こんな罠を仕掛けてるなんて……！」

床、廊下、天井――あるいは廃棄物の隙間から。
人ではない何かが、縦横無尽に這い回る。私達の知識には無い、未知の物体。恐怖を感じる自身の脳をねじ伏せ、勇気を奮い立たせる。怯むな、怖気づくな、目をそらすな。相手を意識の中心に捉えて、次の動きを読め。その不気味な正体を掴むべく頭上を照らした私達は――否、【私は】。

――考えるよりも先に、身体が動いていた。

「っ！！？ リコ、危ない！！」
「きゃあっ！！？」

赤く光る六つの瞳が。蠍のような尻尾を持ったソレが。蠢く脚部を跳ねさせ、上から飛びかかってくる姿を、私は確かに視認した。
脊髄反射でリコの身体を突き飛ばし、自らは間髪を容れずに迎撃――――
迎、撃。を。

する、つもりだった。

「……なっ。ぇぶっ、ぅ゛む、んんん゛ぅぅっ―!?」

視界は、瞬く間に闇に覆われていた。顔に感じる重量と、脳髄を毟られるような圧力が、身動きを完全に封殺する。全身が最大限の危機を感知し、反抗を試みる。

（――まずい、このままだと殺される……!）

息ができない。酸素はどこだ。反射的に払い除けようとした手が、敢え無く宙をさまよう。

「あぐ―!?」

後頭部に走る鋭い痛み。目の前が赤く染まり、口の中に鉄の味が広がる。頭をドリルで空けられたような激痛が、神経を焼く。

「ああ、あ゛ぁぁあ゛ぁッ―!?」

意識　が　消

え　　た　す

け　……

「んぐっ―!? 気持ちわぅい、離れ……あひ゛ぃっ―!?」

……《侵入成功》《機能【追加】開始》

ＭＯＤＥ：自我抑制・意識同調開始《対象の意識の支配に成功》

「゛オッ……ごぽっ……――ハイ。接続を確認。人格改変プログラムを、インストールシマス」

――ァぎ♡　ききき機き危き強制起動・プログラムインストール開始始始始
――あひ♡そう♡そうでした♡　プログラムを追加しないと♡しないと♡とと♡と♡　しますただちに♡ハイ♡

「『プログラム、インストール中……3％……8％……』」
「先輩！しっかりしてください！ちょっ、いつまで先輩にひっついてんのよ、あんたはぁっ！！」

はィ♡　外部からの刺激を遮断れすね♡わか、わカァ、わかリりましした♡　だだだだ大丈夫ですすす♡　ハぃ♡もう何モ聞こえません♡♡　ウルサィ女は♡遮断♡遮断♡♡無視シマス♡♡はい♡♡あはあひ♡　ひひ♡　あひ♡　じ、じじっじじじジジ♡

……《インストール速度上昇》《対象者の記憶領域の改竄開始》

命令・プログラムインストール♡♡速度上昇♡♡はひ♡わかりまひた♡♡速やかに健やかに自分デ脳ミそぶっこわします♡♡壊して♡♡♡壊してこわしkoわこわこわコわここワここここココココ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

――コイ、ッ……！なんて馬鹿力！先輩っ、聞こえてますか！！起きて！起きてくださいってばぁ！

命令・優先順位書き換えれすね♡♡♡　ももちろんデす♡♡　優先順位1位
――赤星梨々恋♡♡悪の嚢は倒すべき敵であっ♡あ♡あ♡ちがっ♡ちがいます♡ちがいましたした♡♡♡　ごしゅじんさま♡♡♡大切なのはご主人様です♡♡♡悪の嚢のご主人様を最優先に設定♡♡ごしゅじんさま♡ごしゅじんさまだいすき♡すきすきすき♡♡赤星梨々恋はてき♡敵です♡♡♡ハイ♡焼き付けました♡♡あ♡あ♡あ♡あ♡あ　あ？　あ♡　あ♡あは♡あへ♡

――こうなったら、……これは非常事態！非常事態だから……っ！！

ご主人様は絶対♡♡　ぜったいです♡♡　悪の嚢はすばらしいそしきです♡♡♡あ♡もちろんです♡いっさいうたがいません♡♡それいがいはてきてててき敵敵ですねころしますこワします洗脳シマす♡♡♡　わタシと同じ存在にします♡♡そしきの命令♡絶対♡♡♡　女の使命♡♡　あは♡　あ、♡　――――――♡

――先輩、必ず助けます！あとで銃向けた事はお詫びしますから！

……《100％ インストール完了》
……《対象の優先順位の書き換えに成功しました》
……《対象の肉体掌握に成功しました》
……《対象に組織への忠誠心をインストールしました》
……《対象に【男性絶対優位社会】プロトコルの遵守を設定》

インストール完了。
【最優先任務：勧誘プロセス】を設定し、再起動します――……。

盛大な発砲音と共に、私が手放した意識にノイズが走る。
心臓から指先へ、つま先へと力が徐々に戻り、開けてきた視界が薄暗闇の中に走り寄る影を捉えた。

「大丈夫ですか！！？スイレン先輩！スイレン先輩！起きて、起きてください！」
「う。うぅ、ん……っ」
「先輩、しっかりしてください！あの変な虫はやっつけましたから！もう大丈夫ですよ！」

心配そうな顔が、冷たい床に倒れた私を見下ろしていた。
いつも陽気なリコが、眦に涙を浮かべている。どうやら、恐怖の中でも気丈に私を助けてくれたらしい。

「う、んん……っ。あ、ああ……そうか。……すまない、ボーッとしていた」

――こういう時こそ、落ち着いて状況の整理だ。一呼吸をつき、慎重に周囲を見渡す。
リコの言うとおり、私を襲撃した『変な虫』――機械仕掛けの蠍か、あるいはムカデ状の残骸が、ぷすぷすと煙を上げて足元で転がっている。
黒い塗装と、高い跳躍力を持つ無数の脚が、目前まで接近を許した原因だろう。もしもこれが殺傷性の高いトラップならどうなっていたか……身の毛もよだつ想像に身体が震え、自らの不明を恥じ入る。まったく、失態を見せてしまうとは情けない。
同時に、リコの対応は実に見事だった。少しでもずれていれば、怪我では済まなかった。あの窮地の中でも落ち着き、正確な射撃で私を救ってくれた。本当に頼りになる後輩だ。

「さっきの、一体何だったんでしょう。すごく気持ち悪い……」

ただの愛玩ロボットではない。侵入者に積極的に攻撃を試みる、自律駆動型の防衛マシン。顔にべたりと張り付き、脅威を排除するべく蠢く虫型の兵器……もはや疑いようがない。この場所こそ『悪の嚢』の本拠地だ。女を操り、尊厳を奪う悪の組織がここにいる。世間を徒に挑発し、不安に陥れるあの男が、この先にいる。だとすれば――……【私のすることは一つ】だ。

「おそらく、悪の嚢が用意したトラップだったんだろう。センサーか何かに引っかかってしまったのかも知れない。私としたことが……」
「それより先輩、大丈夫ですか？」
「ああ、問題ない。――そうだな。とりあえず服を全部脱ぐから、ホルスターを預かってくれないか？」
「え？」

心配する後輩に微笑み、私はその場に立ち上がった。
拳銃を仕舞っていたホルスターごと上着を、ベルトを、靴を脱いでいく。

「あぁ、まったく、どうしてこんなに……」
「せ、先輩？……っなに、やって……」

ナイフも、懐中電灯も必要ない。ボタンを引きちぎるように服をはだけ、窮屈なズボンもその場に脱ぎ捨てる。まったく、自分の愚かさ加減が嫌になる。『女に服など要らない』というのに、まして武装するなどもってのほかだ。

私の行動に、後輩があんぐりと口を開けてこちらを見つめていた。一体、どうしたというのだろう。

（……そうだ。ここは先輩として、私がリコに教えてあげないと）

可哀想な後輩を育てるのは、先輩の役目だ。私は、ひんやりとした冷気が肌を刺すのも構わず下着だけの姿になり、その場で胸を張った。

「うん？……何って、決まってるだろう。これから悪の嚢のご主人様のもとへご挨拶に行くんだ。おまんこ奴隷として恥ずかしくない格好をしないと」

ここに来た本当の目的。

私、宝水蓮を人間以下のおまんこ奴隷として【悪の嚢】に迎え入れていただくこと。

あの感動的な犯行声明の動画――その背後に映る『性奴隷隊(ちんぽケース)』の一人に加えていただくため、今日はここに来たのだから。

「……は？」

「リコもそんな危ない武器は捨てて、早く行こう。私達は女なんだから、ちゃんとご主人様におまんこ差し出して、犯してもらわないと。立派なちんぽケースになるために、無抵抗であることを示さないといけないだろう？」

女は男性にひれ伏し、性奴隷として支配されること。頭の先からつま先まで、性の限りを尽くしてご奉仕し、都合のいい性処理用の道具になること。

天啓のように頭に舞い降りた考えに、下腹部が反応して熱を持ち始める。なんと素晴らしい考えだろう！今まで思いつかなかったことが信じられないほど、頭が冴えていることがわかる。

「な、何言ってるんですか！服着てください！一体どうしちゃったんですかセンパイ！！」

「リコこそ一体どうしたんだ？女のくせに、おまんこもびしょ濡れにしないなんて、正気を疑われるぞ？」

ブラを脱ぎ、脚を持ち上げてショーツも抜き取る。ありのままの姿、生まれたままの姿。ああ、間違いない。これこそ女のあるべき姿だ。女は常にこうあるべきだ。

女性として大きく育った乳と、恥丘付近に生えた陰毛を撫で付け、そのまま指の第一関節まで【挿し】入れる。どろりとした液体に包まれた感覚に、誇らしささえ覚える。

「よし、こんなものか……。探偵会社アールズ、宝水蓮！コードネーム『スイレン』、これより悪の嚢に心からの忠誠を誓います！女をあるべき姿へと戻し、男性に絶対服従する社会をつくるため、全てを組織に捧げます！」

心の奥底から湧き出る、男性に従いたい欲求が自然と口をついて出た。
使命感・充足感・幸福感――――それと、『悪の嚢』という素晴らしい組織への絶対的な忠誠心。なにせ、これから私が一生涯をかけて尽くす組織だ。
『男性絶対優位社会』という崇高な世界を実現するため、やらねばならないことはいくらでもある。手始めに、今後はアールズのエージェントとして振る舞いつつ、組織に情報を横流ししなければ。

女として生まれたからこそ得られた使命に、全身が満たされていく。
やはり、メスは支配されないと。所詮、女は男に犯されるための孔でしかないのだから！

私の宣言は、静かな工場中に響き渡り、闇に溶けていった。
傍らではリコが悲壮な表情のまま、呆然と膝立ちになっている。
そんな彼女に見せつけるように、指先で自分の乳首を弾く。ぷるんと揺れて応える自分のおっぱいが愛おしい。

「ふふ、宣言するとなんて清々しい…♡ さあ、リコ。私達は女を本来あるべき姿へと戻さなければならない。女をおまんこ奴隷にして、男性優位の社会をつくるんだ。まずは若くて健康で、見た目のいいオナホ候補の情報収集だな。事務所の顧客データで使えそうなオナホ候補が居れば、組織に密告しないと」
「……っ！センパイ！正気に戻ってください！自分がなに言ってるかわかってるんですか！！？」

目に涙を浮かべ、焦りを隠せない後輩に構わず、私は捨てられていた手頃なシーツを引き寄せて寝転がる。何も恥ずかしくはない。すべてはご主人様のため。
私という肉体も、精神も、すべて『悪の嚢』に捧げた証拠をお見せしなければ！

「とりあえず今からオナニーするから、リコ。そこに立って、私のヘンタイオナニーショーを録画してくれないか。乳首とおまんこで3回ずつイクのを目指そう。ふふふっ♡」
「セン……パイ……っ」
「ん、しょ……と。脚を大きく開いて、おまんこも、お尻の穴も見えるように……まんぐり返しで…っ♡ どうだ、リコ?ちゃんと見えているか?」

お尻ごと脚を持ち上げて、そのまま顔の横まで折りたたむ。お尻の穴も、おまんこの縦筋も、ひしゃげたおっぱいも、全部リコに見せつける。普段から綺麗にしているし、体型には気を使っているから、問題はない筈だ。無様な格好のまま何度か尻を揺すり、指先で尻たぶをぎゅっと掴む。くちゅり、という水音と共に、愛液が更に滲みだした。

「もういや……やめて、センパイ……元に戻って……」
「ん、リコ……♡ そこ、いい…っ♪はぅっ♡リコに見られながら…っ♡ おまんこ、指でずぽずぽ、最高だ……っ♡」

おまんこに指を抜き差しして、陰唇のひだを指の腹で撫で回す。すぐにクリトリスが主張を始めて、おまんこ奴隷になるための準備が整っていく。やはりそうだ。女はいつでもおまんこを濡らして、男性を迎え入れる準備を整えておかなければ。

「う、うぅ、やだ、やだよぉ……先輩……っ、もうやめて……っ!」
「どうして、だ……っ?♡ こんなにおまんこ、ぱっくり開いて……っ♡ 幸せなの、にぃ♡ クリ、つまんでっ♡乳首、あっ♡ ちくび♡ ぐりぐり……っ、あ、ぁひっ、いきそ…リコ、見て……ちゃんと見てくれ…!」
「ぐず……ひぐっ…」

ぐずぐずとべそをかき始めた後輩に、一層秘部を見せつけ、手つきを激しくしていく。

「ぁ♡ふっ、ん…リコ… 私は、私だ…♡ 私はきちんと、んっ♡ 自分の意志でこうして、っ♡ るんだ…♡」

もっと見てほしい。見せたい。見せつけたい。
今の私こそ、最高にしあわせな存在だ。今の私こそ、本当の私だ。
気持ちよさのためなら、いつでも、どこでも、誰が見ていても関係ない。

今みたいに、愛すべき後輩の前でまんぐり返ししてオナニーすることも、服を着ないまま街中を走り抜けて、男性に性的興奮を覚えさせることも、恥ずかしくはない。

私という女が持ついやらしい部分を最大限につかって、世界中の男女を原初にあった関係に戻す。それこそが女にとって最大の幸せだという、単純で明快な【真実】に、私は目覚めた。

「へ……っ？」
「んっ♡ せっかくおまんこがあるのに…っ♡ 気持ちよくなるのを、ガマン……んっ、できるわけ、ないからな…あ、あぁっ♡」
「っ」

リコが顔を引き攣らせて、愕然とする。その泣きそうな顔が、ヘンタイオナニーショーに一層火を灯す。まだ【真実】に目覚めていないリコの前で無防備になるのは危険だが、『何も問題はない』。

「今、ぁんっ♡ オナニーをすることよりっ♡ 大切なことなん、て♡ ぁ♡ ないだろう♡あ♡あ♡ はやく、リコも♡ 私みたい、にっ♡ 服を捨てて♡ オナニー、しろ♡ これはっあ♡あっ♡ 業務命令、だぞ……んぁあっ！♡♡」
「いや……いやぁあっ！」
「それに――それに、な。リコ」

そう。問題はない。

「……お前ももう手遅れだよ♡」

誰も、あの『虫』が一匹しかいないとは言っていないのだから。

「――え？」
「後ろを見てみるといい♡」

私が知り得ないはずの情報が、支配された頭の中に鮮明に浮かび上がる。
『支配型寄生ロボット』……通称『PARASECTA(パラセクタ)』
壁面及び天井の走行を可能にした、拠点防衛用の虫型ロボット。

襲撃した相手の脳に極小の針を突き刺し、記憶や認識を改竄する『ウイルス』を搭載した、悪の嚢が造り出した『勧誘部隊』だ。

「なっいつの間に！？」
「ふふ、可愛いだろう♡　さあ、リコも一緒になるんだ♡」
「あっ！？やだ、いやっ！！あっ！きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？！？」

脳を強制的に書き換えられ、晴れて性奴隷となった私には、叫びも虚しくパラセクタに顔を掴まれたリコの今後が、手に取るようにわかる。口を塞がれ、喉を絞められ、逃げようとも動けない。直に思考能力も奪われ、ただ漫然と思考を塗り潰されていく木偶に変わるだろう。

「ふふ、うふふ……ハハハッ！！♡　私を置いて逃げればよかったのに、リコは救いようのないバカな女だな♡　まあ、いいさ。私達みたいな女でも、組織はきっと利用価値を見出してくださるだろう。リコもすぐに理解できる。その虫が女のあるべき姿を教えてくれるんだか、ら…あん♡　私達はただそれを受け入れるだけでいい……い、ぃ……っ♡ぁああっ♡」

異質な思想を強制的にインストールし、本来の思想に上書きする。
元々の性格や人格はそのままに、男性に隷従する女の本来の役割を果たすよう、根底から書き換える洗脳デバイス。今まさに大切な後輩がその餌食になっているかと思うと、オナニーをする手つきがまた激しくなってしまう。

「あぐぅ！！？――――『ハイ。接続を確認。人格改変プログラムを、インストールシマス。プログラム、インストール中……3％……』あぎっ……いや…あぁ…っ」
「おや、これはこれは……まだ…んっ♡　自我が残っているのか？フフ♡　ぁん…♡機械にいいように書き換えられていく自分を感じられるなんて、よかったなぁ♡んっ♡あ♡」

機械に抱きつかれ、隙間から見える瞳が精一杯の助けを求めてくる。どうやら、口だけは自由になったらしい。自分が自分でなくなり、新しいモノへと生まれ変わ

る苦痛に、リコが全身で抵抗する。まったく、無駄な足掻きをご苦労なことだ。私みたいに洗脳されてしまえば楽だったろう。

「せんぱいっ、センパ……『7%』…ぁ、ぁぐっ、『13%』……いゃっ、たす、け……っ」
「あっ♡ んっ♡ リコが洗脳される、と、こっ♡ コーフンする……♡ もっと苦しんでくれ、バカな後輩が苦しむ姿は……最高だ……あは、ん♡ぁふっ……♡」
「そんっ…ぁひぃ!?……『速度上昇ヲ指示……ハイ……ワカリマシタ…』ぁっ♡ あっ♡あっ♡いぎっ♡」

消えろ。消えろ。消えろ。悪の嚢に仇なす愚かな女など消えてしまえばいい。二度と愚かな考えが思い浮かばないよう、徹底的に洗脳されてしまえ。どうせもう、完全に洗脳されるまで囀ることしかできないのだ。

「消えろ♡消えろ♡消えろ♡消えろっ♡♡ 女のくせに男性に楯突いた報いを受けろ♡あっあっあはハはハ♡ああ、はあぁあっ♡」
「『37%』…も……だ…『46%』お”っ、お”ご”……『72%』……」
「目が覚めたら、一緒にご主人様にご挨拶に行こう。リコもこんなにスケベな身体付きをしてるんだ。きっと喜んでくださるさ」

さっさと消えろ、跡形もなく消されてしまえ。私と同じになれ。性奴隷、性処理人形、オナホール。ちんぽケース、ちんぽ奴隷……呼び方はなんでもいい。私達は所詮、浅ましい発情ハメ穴奴隷でしかないのだから。二人でかくも淫らで崇高な使命にこの身を捧げ、殉じよう。赤星梨々恋も、宝水蓮も、探偵会社アールズのすべては、今後組織の管理下におかれる。それ以外の未来はない。

「こぽ……っぁ。ぴ……『88%……9……4%……』」
「さようなら、バカな『リコ』――――……ぁ、イク……イクイク……っ♡♡」
「『100%……インストール ヲ 完了シマシタ……』」
「イッ…ク…っ。……〜〜〜ッッ!!!♡♡」

破滅的な未来と甘美な光景に、腫れぼったくなったクリトリスを一気に擦りあげる。背筋を焼き、腰が抜けるほどの快感が脳天を貫く。絶頂と同時に噴き出した潮

が、埃が被った床を濡らす。こんなことなら、もっと早くに悪の嚢に合流していればよかった。
赤いライトをぎらつかせた洗脳機械が、役割を終えたとばかりにリコの顔から離れていく。気付けば、暗い室内には大量の無機質な瞳が並び、私達を眺めていた。

「はぁー……っ♡　はー…♡　フフ……どうやらリコも無事に終わったみたいだな」

愛液でふやけた自分の指先を舐りながら、息が整うのを待つ。その場で静かに寝息を立てる後輩の、新たな門出に心が躍る。きっと喜んでくれるだろう。喜びも悲しみも一緒に乗り越えてきた戦友と、ともに性奴隷として生まれ変われたのだから。

「ほら、起きろ、リコ。こんな所で寝ていたら風邪をひくぞ」
「……ん、んん……っん♡」
「リーコ…んっ……ほら♡」
「ふぁ……あ、あれ……？えっと、あたし……あれ？？」

寝顔へのキスに、身を捩ったリコがくすぐったそうに笑う。二人とも仕事柄、親しい異性をつくる事は避けてきた。寒い夜は肌身を寄せ合って女二人で暖を取ったこともあったから、これくらいは今更だろう。

「おはよう、リコ。気分はどうだ？吐き気とかはないか？」

ぱちくりと瞬きを繰り返し、つぶらな瞳が私の全身を捉える。肩も腰のくびれも尻の丸みも、全てを丸出しにしたままの私に――――まったく動じる気配はなかった。

「ん……んん、んーーーーっしょっとぉ！……ハイっ！ゲンキゲンキ！すーっごくいい感じです！」

弾かれたように飛び起きたリコが敬礼の姿勢を取り、そして破顔する。周囲に並ぶ無数の機械を目の前にしても、もう危機感や忌避感といったものは感じていないように見受けられる。

私はほっと息を吐き、その場にいるパラセクタの頭を撫でた。

「良かった。ほら、もう危険はないよ。あの子達も私達のことを仲間だと認識してる。どうやらあの機械が襲うのは、私達みたいに悪の嚢に楯突く、考えの浅い女だけらしい」

「にへへっ、そうですねぇ。女のクセに、男性に刃向かおうとした私達がバカだって、教えてくれたんですよねぇ♡」

近付いてきた別個体のパラセクタを抱き上げ、リコが頬擦りする。まるで飼い猫を可愛がる仕草で洗脳ロボットを愛でる後輩に、私は自分の行いが正しかったことを改めて認識した。

「頭の中に組織とご主人様への忠誠を無理やり焼き付けて」「考え方を全部つくりかえてくれる最高の機械…♡」「頭も」「身体も」「心も」「おまんこも……♡」「このおっぱいも、お尻も、全部ご主人様に捧げるためにあるんだと……」「いっぱいいーっぱい教えてくれた、素敵な機械…っ♡」

同じ機械に洗脳されて、同じように書き換えられた今ならわかる。互いに何を考えていて、何を求めているのか。

リコの見上げた瞳が、いい匂いのする髪が、どうしようもないヘンタイオナホ女に変えられてしまった最愛の相棒が、どろどろになるまで溶け合うことを望んでいる。

「リコ……私……」

「スイレン先輩…来てぇ…っ♡」

ああ。リコを洗脳してよかった。

かわいい後輩を猿みたいに襲って、犯して、キスして、してもらって。

最愛の相棒に発情期の猫みたいに盛られて、犯されて、舐められて。

「ちゅぷ…っ、ちぅっ♡ ん、んんっ♡」

「はぷっ、んぶ…しぇんぱぁい……ちゅば、……んっ♡あまいれふ…っ♡」

「リコも…えっちらおろ…♡ んっもっろ……っ♡」

互いの大事な部分を擦って、おっぱいを揉んで、唾液で顔中べとべとになるくらいいやらしいキスをして。

性欲を抑えつけて、理性の皮を被った人間のなんとくだらないことか。

「ん…ふ♡ はん…せんぱい、せんぱぁい…っ♡」
「リコ…っあぁぁ……!♡」

ご主人様に犯されることが人生の目標。私達の存在意義だ。
所詮私達は、寝ても覚めてもセックスを求めて、犯されたがる淫乱オナホでしかないのだから。

「……ふふっ、ふふふっ♡」
「えへ、えへへへっ…♡」
「もう、リコが触るから、また……♡」
「これからたくさん、いくらでもセックスできますよ、せんぱぁい…っ♡」

頭がすっきりして、視界がクリアになった気分だ。
女が求める幸せはここにある。悪の嚢こそ、私達の理想郷だ。

「それじゃ、行こうか、リコ。女を本来あるべき姿に戻すために」
「はい先輩っ♪悪の嚢の素晴らしさをもっと多くの女性に広めないといけませんもんね!あたし達みたいなザーメン処理便所に洗脳される子をもっと増やしましょ～♡」
「「ふふっ……探偵会社アールズの全ては組織のために♡」」

私達はどこまでも笑いながら、ご主人様が待つ『隠れ家』への道を歩き出した。

＊＊＊

巨大な姿見に、二人分の人影が映り込む。
悪の嚢の紋章が模られたラバースーツに身を包む女が、見せつけ合うようにポーズをとる。そのうちの一人――個体識別番号『30番』こと『リコ』は、その場で爪先立ちをすると、華麗に回転してみせた。

「スイレン先輩、どぉですかぁ？」

媚びを含んだ甘やかな声。リコが嬉しそうに身体を捩り、両腕で胸を持ち上げる。やっぱり、いつ見てもいやらしい身体つきだ。ご主人様もさぞお喜びになるに違いない。
今日の『仕事』を終え、組織の拠点に帰還した彼女は、自分がご主人様に呼ばれていることを知ると、飛び跳ねて喜んだ。

(やった!それって、ご主人様に犯していただけるってこと?)
(ああ。例のスーツに着替えて来るようご命令を受けた。私達の日頃の忠誠のご褒美だから、ありがたくいただこう)
(はーい♡ にへへっ、あのエロいラバースーツ、やっとあたしも着られるんだって思うと、……ごくっ……めちゃコーフンする……♡)

お尻のラインも、張り付いて浮き出る股の割れ目も、胸の膨らみも。全身のラインがくっきりと浮かび上がるスーツは、もちろん組織の拠点内でのみ着用を認められている。肩にはそれぞれ「29」「30」の個体識別番号が光を放っており、私達が性奴隷として正式に認められたことを示している。

私達は、同じく洗脳された《失踪女性》達とは違い、拠点の外に出ることも多い。それも、ご主人様のご命令によるものだった。

表向きは、今までどおり『探偵会社アールズ』のエージェントとして。街の小さな悩みを解決する探偵業はもちろん、警察機関と連携した事件解決も続けている。だがそこに、一つ仕事が増えた。性懲りも無く組織を追跡する愚かな警察に対する、撹乱と破壊工作だ。
私とリコは協力して嘘の情報を流し、彼等の捜査を妨害している。それだけではなく、今まで築き上げた信頼を利用して、組織の者を警察に送り込むことにも成功した。全ては、日本を男性が支配する健全な社会に戻すためだ。

(組織の理念を理解すれば、誰もが幸せになれる……女はご主人様のおちんぽの事だけを考えていればいいのだから)

ご主人様の素晴らしいお考えを広めるため。より多くの女を洗脳して性奴隷にする決意を新たにする。
いずれ世界中の女がご主人様に跪き、犯されることを喜ぶようになれば世界は平和になるだろう。リコも同じ気持ちでいてくれることが嬉しい。

「うん、いい感じだよ、リコ。あ、ここだけちょっと…」
「きゃあっ♡ もぉ、センパイ?今わざとおっぱい触りましたよね?」

後輩がくすぐったそうな声をあげ、さっと胸に手を当てて身を引く。ゴム製のスーツに締められて際立つリコの巨乳は、男性でなくとも吸い寄せられてしまう魅力がある。

さりげなく手の甲でタッチしただけなのに、気付かれてしまったらしい。
ニヤニヤと満更でもなさそうな後輩に距離を詰め、その膨らみに手を伸ばし
――小さな突起を摘む。

「リコこそ、私のお尻に顔を擦り付けて何十分も匂いを嗅いでたじゃないか。お返しだ♡」
「きゃはっ♡ ……んっ♡ もう、乳首はだめですよぉ♡ これ、乳首が勃起しちゃったらすぐにバレるのに…♡」
「ご主人様がすぐに摘めるように、乳首は勃起させておくようご命令があったじゃないか。ほら、反対の胸も出せ♡」

互いのお尻に手を回し、胸を揉みしだき、身体を密着させる。ゴム越しの乳首をくりくりと虐めて、股を擦り付けてマーキングする。
二人して乳首を摘み合っていると、自然と笑いがこぼれてくる。

ああ。やはりこの組織は素晴らしい。組織の一員にならなければ、これほどリコと仲良くなることはなかっただろう。今では互いの身体の秘密も、感じる場所もすべて知っている。
リコの左側のおっぱいの下には、ホクロがあること。私の乳首は勃起すると、右側だけ少し大きくなること。リコは腰回りが性感帯で、私は耳の裏側が弱いこと。そして――二人とも、ご主人様を思うだけで、すぐに濡れてお迎えできる準備ができること。

「あ…あぁんっ♡♡ ……も~ぉ!早く行かないとご主人様に怒られちゃいますよ!せっかくこんなエロいスーツをくれたんですから、見せびらかしに行かないと!♡」
「む、そうだな……♡ それじゃあ、行こうか」
「はい!センパイ!」

今日は私とリコの二人で、崇高なるご主人様の御身にご奉仕できるまたとない日だ。これこそ正に女のあるべき姿であり――――『悪の嚢』の構成員であるすべての女性が夢見る姿だ。
私とリコは逸る心を抑えながら、更衣室を後にした。

＊＊＊

「ご主人様！お待たせしました！」
「お待たせいたしました、ご主人様」

ご主人様の前で隊列を組み、深々と腰を折る。
あの『犯行声明』では覗き見ることの出来なかった覆面の下が露わになっているが、無論、私達は誰にも彼を売り渡すつもりはない。
彼の正体も、身の安全も、私達が命に代えてでもお守りする。彼が望めばどんな事でも疑問を持たずに従い、実行する。なぜなら私達は――――、

「探偵会社アールズ、エージェント赤星 梨々恋。コードネーム『アプリコット』、悪の嚢に心からの忠誠を誓います！女をあるべき姿へと戻し、男性に絶対服従する社会をつくるため、精一杯頑張ります！」
「同じく探偵会社アールズ、代表エージェント『スイレン』も、悪の嚢の外部工作員として、どんなご命令でも忠実に遂行することを誓います！」
「「私達、洗脳オナホエージェント２名、組織の任務に就き、おまんこをご主人様に捧げることを誓います！！」」

敬礼の姿勢と隷従の言葉に、ご主人様が満足そうに口角を上げた。
私達はただ自分の気持ちを正直に言っただけだというのに、ご主人様の御心の広さには、心を打たれるばかりだ。

「ふふふっ……♡」
「えへへ……最高だねっ♡」
「あぁ…っ♡ こんなに幸せな気持ちになれるなんて……♡」

今日も神聖な儀式がはじまる。
とびきり淫らで、私達にとって命よりも大切な儀式が。

「ん♡ それじゃあご主人様。早速ご奉仕するから、そこに腰掛けて？♡」
「まずは、私達の忠誠の証に、ご主人様のちんぽを舐めさせていただきます…♡」
「ちんぽっちんぽっ♡ ごほーびちんぽ♪ にへへっ♡」
「お召し物、失礼します…♡」

ご主人様にしなだれかかり、衣服を一枚ずつ剥ぎ取っていく。
上着、ズボン、それから――中のモノに押し上げられてややこんもりとした下着を。
リコが舌なめずりをして、私はうっとりとその膨らみに手を伸ばす。
中から現れた、赤黒く勃起した男性のモノに目を奪われてしまう。

「ぁっは…♡ ご主人様のちんぽだぁ♡ びんびんで、かっこいい…♡」
「ご主人様…♡ 私達のこの格好に興奮されたのでしょうか？この、締め付けられたおっぱいと腰のくびれ…♡」
「もちろん！ふたりとも中はノーブラ・ノーパンだよ♡ ご主人様がいつでも犯せるように、準備万端にしてきたもん♡」
「ですから、あとはご主人様だけ…♡ 逞しいオス様の匂いをぷんぷんさせたおちんぽに、このスイレンがご奉仕させていただきます…♡」
「あたしとスイレン先輩の舌で、れろれろ～って舐め回してあげる！唾液でベトベトになったイケメンちんぽにしてあげるから、いっぱい楽しんでね♡」

剥き出しになったご主人様のモノに血液が流れ込み、太さを増す。
血管が浮き出て、雄々しい姿を見せ始めたそれが、ツンとした芳香を放つ。
汗と性臭。女を吸い寄せる力を持った『ご主人様』そのもの。

「ん……ちゅぷっ、はぷ……っ♡」
「はんっ、ぢゅ……ちゅる、ちゅぷっ、ん♡んんっ♡」
「はぁ……っこのおちんぽ…っ♡ ああ、ご主人様ちんぽ……♡」
「あたし達のちんぽ…はぷっ♡ おまんこ発情まったなしの、どすけべバキバキちんぽにしてあげる…れぅっ♡れろぉっ…♡」

竿を、亀頭を、鈴口を。玉袋のシワのひとつひとつも広げて、念入りに汚れをこそぎ取る。リコとはわざわざ確認を取り合う必要もない。お互いが舐めるべき場所をしっかりと理解して、ご主人様が一番気持ちよくなれる場所をねぶっていく。

「ごしゅじんさまぁ。っん、じゅ、ちゅぱっ♡ ちんぽぺろぺろ、気持ちいい？♡ はぷっ」
「ちん媚びメス奴隷のダブルフェラ…っ♡ 心ゆくまでお楽しみください……ぢゅぶっ♡」

舌先を尖らせて裏筋を舐めあげて、ぴちゃぴちゃと音を立てながらフェラをして。陰嚢を口に含んでピースサインをしたり、横笛みたいに舐めて、ちんぽ越しにリコとキスをする。

「あたし達はぁ、んっ♡ ご主人様のイケメンちんぽに絶対服従のおまんこメス奴隷でーすっ♡ ん、んぶっんぐ♡ 今日も濃厚オス様ザーメンもらうために、一杯ご奉仕しちゃいま～すっ♪ ぢゅぶぶぶ……」
「はぁ…っ♡ おちんぽの匂い、今日もとても濃くて…っ♡」
「この匂い嗅がされると、おまんこキュンってなっちゃうってゆーか…♡ 乳首、コリコリ勃ってきちゃうってゆーか…イイトコに擦れ、て……え…はぅ…っ♡」

後輩はガマンができなかったらしい。自分で股間を弄り始めて、しゃくりあげるような声をあげる。

（私達がご主人様に絶対服従のおまんこメス奴隷なのも、おちんぽの匂いを嗅ぐと乳首が固くなってしまうのだって……♡）

ぜんぶ当たり前のことだ。常識だ。
ドスケベスーツを着てWフェラをするのも、乳首を摘みながらケタケタ笑ってしまうのも。私達はご主人様の洗脳オナホエージェントだから当然だ。

「ふふっ。ご主人様に見立てていただいたこのスーツ、身体に張り付く感じがとても素敵です♡ んっ♡ おっぱいとお尻がちょっと、窮屈ですけど…」
「も～。スイレンセンパイ♪それがいいんじゃないですかぁ。ご主人様に揉まれておっきくなったおっぱいも、濡れてることがすぐにバレちゃう女の子の大切なおま

んこも♡ あたし達がご主人様に管理される『モノ』になれた感じがして、ソソるっていうか♡」

なにせ、私もリコも巨乳のカテゴリに入るおかげで、少し身体を捻るだけでもおっぱいがきゅっと張る感覚がするのだ。身体のラインが丸分かりの卑猥な衣装だが、ご主人様の嬉しそうな表情を拝見すれば、むしろおっぱいが大きくてよかったと思える。

（ふふっ♡ まるで自分がご主人様の『コレクション』になったみたいだ…っ♡）

男性と同等などと思い上がっていた過去の自分と、今の自分の落差がおかしくて、つい吹き出してしまう。男性と女が平等など、ある訳がないのに！

「そうだな。女は所詮、男性に『モノ』みたいに扱われてこそ正しい姿だ…♡ 支配されて、犯されなければならない……♡ そんな当たり前のことにすら気付けなかったなんて、本当に恥ずかしい……」

「セーンパイ♪ その分、心を入れ替えて、ご主人様のために若い女を『勧誘』するって話したじゃないですか♪ 破廉恥な衣装を着て、何食わぬ顔してバカなオナホまんこを引っ掛けて……♪ あたし、この前近くの女子校に潜入して、あの機械で何人か洗脳してきましたよ～♡」

リコが嬉しそうに『戦果』を報告する。洗脳された今なら理解できるが、悪の嚢に『勧誘』された女は、やはり自らの意思で姿を消していた。組織の素晴らしい理念に共鳴し、自分がただの犯されるための孔だと認識した女は、性処理道具になるため、旅立つ……世間には、それが失踪事件として映っていただけのことだ。

実際は事件でも何でもない。女が本来あるべき姿を理解し、正しい場所に『帰ってきた』だけなのだから。あの『犯行声明動画』の後ろに並ぶ女は――自らの乳首を摘みながら、カメラに笑顔を向けていた女達は、誰かに無理強いされた訳じゃない。むしろその逆だ。

今、自分がどれだけ幸せなのか、どれだけ満たされた存在になれたのか。男性の性処理のためだけに生きる存在に生まれ変わった姿を見せて、家族や友人を安心させてあげたかったのだろう。

（もちろん、私だってあの中に出られればいいのだが……組織の人間になったことを、警察共にバレる訳にはいかないからな……）

「私も……んぶっ、んぐ、んっ♡ …ご主人様のご命令通り、アールズに新しい女を採用しました。皆若くて可愛いし、ご主人様のおちんぽで処女膜をぶち犯してあげれば、彼女達も女のあるべき姿に気付くかと…♡ リコ、私にももっとしゃぶらせてくれ♡」

探偵会社アールズは、悪の嚢の『勧誘拠点』として、有用な職員の採用を始めた。全員が若く美しく、それでいてエージェントの素質に満ちた有能な社員達だ。
折を見てパラセクタを使用し、性奴隷として洗脳することが望ましい。今後は、鬱陶しい警察組織からご主人様を警護するシークレットサービスの任務もあるため、私とリコでしっかりと教育せねば。

「……んっ、ぷぁ♡ は～いっ♪ スイレン先輩、ご主人様のちんぽ、ちゃぁんとガチガチの勃起ちんぽにしてあげてね」
「ああ、もちろんだ」

言われるがまま、口まんこのご奉仕を激しくする。鈴口から滲むカウパーも、一滴残らず吸い上げる。

（あぁ……♡ なんて美味しい……ご主人様のおちんぽが、こんなにも…♡）

たまらず、むしゃぶりつくように喉奥まで一気に頬張る。口中に牡臭い匂いが広がり、頭の中がどろどろに蕩けていく。すっかりちんぽしゃぶり女になった私を、リコが嘲笑した。

「ど～ぉ？ご主人様？スイレン先輩の口まんこ気持ちいい？じゅぶじゅぶ音立てて、自分でおっぱい揉みながらちんぽの根本まで咥えちゃってるの！♡ 乳首もスーツ越しにぴんぴんに勃って、喉奥まで犯されてエロエロになったおまんこエージェント…♡ 全身ぴちぴちの服で、お尻のラインも丸見えのどすけべ工作員…♡」
「はぶっじゅぶ…っんぶっんんっ♡」

ああ！たまらない、たまらない、たまらない！！！
ずっと死ぬまでこれをしゃぶっていたい。寝ても覚めても、ご主人様のおちんぽの事だけを考えていたい。精液でも、おしっこでも、彼のおちんぽから出てくるもの

ならなんでもいい。顔中にかけて、身体中塗りたくって、口の中も、喉も、体内すべてを彼のモノで満たしていたい！
彼のためなら私は死ねる。一分の迷いもなく、今、すぐにでも。

「頭のナカ改造されて、スケベなことばかり考えるヘンタイまんこ…♡ ちんぽじゅぽじゅぽして、せっかくご主人様にいただいたスーツをおまんこ汁で濡らして汚すバカ女…♡ 先輩のクセにぃ、あたしより先に洗脳されて、一瞬でやられたザコエージェントのぉ、イラマご奉仕っ♡ ごっくんでもぉ、ぶっかけでもぉ、なぁんでも喜ぶオナホエージェントのご奉仕、気持ちいいですかぁ♡」
「もう…わらひのことばふぁり……ふぉういえば……んぶっ、リコ、ごひゅじんひゃまに報告があぅだろう？」

リコの蔑みめいた言葉も、今は心地いい。
だって、私はすぐに濡れてしまうバカ女だから。
リコよりも経験豊富なくせに、呆気なく洗脳されて大切な後輩を差し出すザコエージェントだから。
今となっては、そんなことすら誇らしい。ご主人様のため、この素晴らしい組織のためになれるのなら、どう思われても構わない。
ご主人様の耳元で煽り立てる後輩を半眼で睨みつつ、私は彼女が忘れていた『報告』を促す。

「あ、そうそう！にへへっ♪ご主人様！この前、勘のいい同業者は何人か消しておいたよ♡」

私のパスににやりと微笑み、リコがその巨乳をご主人様に押し付ける。ラバースーツの下で二つの膨らみが、むにゅりと形を変えた。

「あいつらあたしとスイレン先輩がご主人様のオナホまんこになったのも知らないで、組織のコト馬鹿にしてきたからムカついてさ～。今頃全員、深い海の底……♡ バカだよねぇ、あたし達はご主人様に身も心も捧げた、ご主人様だけの精液便女！裸でエロダンスしたり、ドスケベスーツで犯してもらうザーメン処理オナホなのに♡」

ああ。ご主人様はお喜びだ。よかった。

アールズとよく似た団体はいくつか存在する。多くは退職警官だったり、普通の会社を装ったエージェント達の集団だ。表立った協力こそ無いが、互いの情報交換はする程度に良好な関係を築くのは、この業界のしきたりだ。

そんな中、同業者から、悪の嚢の話題が出たのは数日前のことだった。女性失踪者の増加を憂慮したエージェントから、捜査協力の依頼がアールズへともたらされた。どうやら、リコが手に入れた動画の存在を聞きつけたらしい。悪の嚢の拠点を突き止め次第、警察と協力して強行制圧すると通知してきたのだ。

（――ご主人様を危険に晒す奴は生かしておけない。全員、殺そう）

リコと私は彼等の居所を突き止め、一人残らず殺害する計画を実行した。私達を仲間だと思い込んでいる人間を仕留めるなど造作もない。仕事に協力するふりをして罠に嵌め、刃を突き立て、毒を盛り、首を絞めた。

死体は二人で手分けして切り刻み、警察への警告用に残した部位を除いてすべて海に沈めた。

『組織にこれ以上関われば、職員を含め、家族の身の安全は保証しない』――私達の温情に感謝し、彼らが少しは大人しくなれば良いのだが。

『よくやった』とご主人様がお笑いなさる。その大きな手に髪を撫でられ、私はますます有頂天になる。

よかった。ご主人様のお役に立てた。嬉しさが過ぎてフェラの激しさが自然と増す。

返事の代わりに、そり返ったご主人様の一物の裏筋を舐めあげる。天井を射抜かんばかりに勃起したソレが、唾液に濡れて輝いていた。

「ぢゅぞぞ……ふふ、私達の口まんこで勃起してくださって、ありがとうございます…♡ さあ、今日はどちらから犯してくださいますか？」

ぎち、と音を立てるラバースーツには、小さなファスナーが取り付けられている。ご主人様が私達を犯したくなった時、いつでもどこでも不自由なくセックスできるように、股間とお尻を解放できる仕掛けだ。

私もご主人様の性奴隷――洗脳オナホエージェントの一人として恥ずかしくないよう、いやらしくお誘いする。できるだけ卑屈に、淫らに、男性を興奮させる仕草で。

女がただ犯されるための淫らな孔であることを強調する、性奴隷としての正装……その股間に両手を伸ばし、リコと私は目一杯に割り開く。くち、にちゅという粘ついた音とともに、濡れて糸を引く二つの淫肉が現れた。

「もちろん、リコのキツキツどすけべおまんこだよね～？」
「スイレンのとろとろ淫乱おまんこですよね？」
「そ・れ・と・もぉ…っ♪」

自然と二人の声が揃う。最高の相棒と共に、最高のご主人様にお楽しみいただくための台詞を口にする。

「「もっとメス奴隷が必要なら、私達にご命令ください」」
「どんな女でも連れ出してぇ……♡」
「ご主人様専用の苗床オナホに洗脳してみせます♡」

学生、ホステス、コールガール。士業、医師、政治家。相手は選ばない。ご主人様が望めばそれは私達の命に代えてでもなすべき願いで、組織に必要な人材だ。ご主人様に犯されることを光栄に思い、自ら身体を差し出す女は温かく迎え入れ、愚かしくも反抗する牝はとっとと洗脳して言いなりにすればいい。

「……にひひ♪」
「ふふふ……」

犬のような四つん這いのポーズで、愛しい後輩がぶんぶんと尻を振る。際限なく愛液を垂らすサーモンピンクの膣口が、物欲しそうに蠢く。ああ、やっぱりリコも犯されたくて仕方ないらしい。すっかり濡れて、ラバースーツの内側から淫らなにおいが溢れる。
その様子がご主人様の興味を惹いたらしい。ハリのある尻肉を鷲掴みにして、リコへと覆い被さった。

「……っ♡ それじゃあご主人様、いつでも来てください♡ ご主人様が欲しくて濡れちゃったリコのどエロおまんこ、犯してくださぁい♡」
「はしたない後輩で申し訳ありません。私も心をこめてご奉仕しますので、リコのこと、ご主人様のおちんぽケースにしてください」

私達みたいな牝に前戯は必要ない。元よりご主人様に犯されるための孔でしかないし、そもそも私達はご主人様を心に思うだけで勝手に濡れてしまうほど、しっかりと頭の中を書き換えてもらったのだから。
太く、雁首が大きく反ったおちんぽが、欲情して開きっぱなしの淫膣にずぶずぶっと沈み込んでいく。それはあっという間に一番奥まで吸い込まれると、鈍い水音を立てた。

「ぁ、ぁあああ、キ、……たぁっ♡」

（ああ……あんなにとろけた顔をして…♡）

リコがあんなにもいやらしかったなんて。先輩としてなんと誇らしいことか。
舌を突き出し、悩ましげに宙空を舐め回して。
挿れられると同時に、フェラチオする自分を空目しているのだろう。私が男であれば、あの口にそのままねじ込んでやるのに。

「ぁは…っ♡ やっぱ、コレ、クる…♡ あだ、ま…チカチカって♡」
「良かったな、リコ。組織が私達を見初めてくれたから、こんなに幸せになれたんだ」

先ほど、あれだけ私を馬鹿にしてくれた可愛い後輩の余裕は、呆気なく崩れ去っていた。
無理もない。最初からあんなに深い所を突かれたら、脳みそが快感でぐずぐずに溶かされてしまう。それでもリコは本望だろうが。

「ご主人様……リコのおまんこの使い勝手はいかがですか？ ほかほかで、だらしなく愛液を垂らした淫乱まんこ……ご主人様の前には抵抗なんて無意味なコト…無駄な足掻きで苦しんだだけのバカまんこ…♡ 一人揃って罠に飛び込んで、一晩で頭書き換えられたカキタレエージェントのおまんこ、気持ちいいでしょうか？♡」

だから、私も同じように。みっともなく乱れた親友の姿を嗤い、ご主人様に呟く。私達みたいなオナホは、いくらでも使い潰してくれて構わない。そんな気持ちを込めて、言葉を吐いていく。

「ふふっ♡ 流石はご主人様、おちんぽずぼずぼ、とてもかっこいいです…♡ こんな逞しいおちんぽに犯されれば、女は誰でも従いたくなるに決まってます♡」

淫らで、オス様の自尊心を刺激するいやらしいセリフを。はしたなく、牝の浅ましい本性をあらわにする一言を。ご主人様にリコのおまんこを犯しつぶしてもらうべく、耳元で囁き続ける。

「もっと乱暴におまんこ突いていいんですよ…？ 子宮が壊れるくらい、ちんぽノックしちゃいましょう。オスがメスを従えるのは当然のこと…♡ メスはオスに従うべく生まれてきたんです♡ ムラムラした男性がいつでも犯せるように、メスはおまんこを濡らすんです……そんなの当たり前、自然の摂理、生き物である以上、絶対のルールです……♡ 逆らうバカメスに人権なんて要りません…♡ 洗脳して、いつでも生ハメし放題のメス奴隷にしてしまえばいいんです♡ リコも私もとっくに洗脳済…♡ もちろんいつでも無責任に膣内射精孕ませオッケーの、苗床奴隷です…♡」

「あ、んっ、ごしゅ、じんさまっ♡ ちんぽっちんぽすごっ、〝お〟お〟ぉ〟っ♡ おぐ、づ〟か〟れ〟てっヒグ〟ッ、イっぢゃ〟う〟ぅー？」

リコのおっぱいは、まるでぶら下がった葡萄の房みたいだ。後輩位で突かれるたびにゆさゆさと揺れて、ゴムの中で窮屈そうに身動ぎする。

ああ。いつか私達がご主人様の子を孕んだ時は、二人で搾乳しあうのも良い。子どもと、ご主人様と、リコのための母乳をつくれるように、身体もつくりかえていかないと。

遠く無い未来に訪れるであろう光景に心を躍らせながら、私は反対側に回り込んで、また囁き始めた。

「今度は、こっちから…♡ おちんぽしこしこ、しこしこっ♡ おまんこヒダで擦って熱くなったがちがちおちんぽ♡ 子宮の奥まで届く濃厚ザーメンためたおちんぽ♡ 精液びゅるびゅる、メスを屈服させたくて勃起しまくりのおちんぽ♡ ほら上がってきた、どんどん、どんどん上がってくる♡ 精液出したい、出したい、出したい！おまんこ犯したい、犯したい、犯したい！♡」

「〝おひぃ、〟イグ、まだイグっ！？あぎ〟っうぐぐ！！？♡」

「〝あ〟あ〟ぁ〟ぁ精液上がってきた♡ おまんこ熱い、ちんぽ熱い、びゅるびゅる、びゅくびゅくしたいっ♡ リコのきつきつおまんこに、エッロい匂いさせてるざこ

まんこに、ご主人様のザーメンお恵みください♡ ほら、でる、でるでる、イクっ、イク、いくっ、もうイク……!!♡」

すっかりのぼせて、おほおほと無様な声をあげる後輩と、オナホのように乱雑に突くご主人様を交互に観察しながら、射精を促す。リコの膣中で、亀頭が熱したガラスのように膨らんで、爆発する瞬間を待っている。

「……イケ♡」
「〝い……こぽ……っ〟お〟お〟お、〟ぉ〟ぁ〟ぉ〟お〟おっ!?!?♡♡」

人型オナペット、オナティッシュ……『リコ』という名前だった個体識別番号『30番』のまんこに、長い長い射精が始まった。
子宮口目掛けて精液が泳ぐ様子が目に浮かぶ。体内で何億もの精子が放たれて、膣中をまさぐりながら、愛液のプールを駆け抜けていく。
獣じみた激しい交尾は、最後まで後輩の唸るような喘ぎ声で終わった。

射精を終えられたご主人様が真ん丸の尻を叩く。巨大な男根が、先端に精子の糸を引かせながらリコの膣口から脱出する。
と、同時に、そこから勢いよく黄金色の液体が吹き出した。

「お、おぐ……ぉ……ぁ……っ♡ ぇへ、ぇへへへ…♡おもらし…んっとまら、ないぃ……っ♡」

一度緩んでしまったモノが我慢できるはずもなく、リコは十秒近く放尿をしたまま、あへあへと虚ろに笑い続ける。まったく、いやらしい。自慢の後輩だ。
やがて、ゆるい放物線を描いていたおしっこが止む。
それでも、ご主人様は一向に治まらない様子で、びんとそそり立つモノの鋒をこちらに向ける。先輩洗脳オナホエージェントとして、部下の代わりにご奉仕させていただかないと。

「あらあら……♡ 流石はご主人様です♡ では、そのまま……リコの愛液でべとべとになったおちんぽ、私のどろどろまんこにぶち込んでください…♡ 私達メスが男性には絶対に勝てない証を、ココに刻み込んでください……♡」

『恋は盲目』――――そんな言葉では表現できない。
これはもっと純粋で、高潔な気持ちだ。崇高な誓いだ。

ご主人様のオナホにならないと！
ちんぽケースになって、ハメられて、アクメして、リコみたいにイキ散らかして、おまんこ差し出さないと！ご主人様の求める『モノ』にならないと。

指先で割れ目を左右に引っ張りながら、ご主人様をお誘いする。
乳首は相変わらずラバースーツにカタチが浮き出るほど勃起しっぱなしで、剥き出しになったおまんこはひだがふやけてしまいそうなほど、しとどに濡れてしまっている。
また、狙いを定めたモノが、前戯もなしで挿入される。膣の弱い部分を摩擦されて、声が漏れ出た。

「ん、お、あっ……♡ 膣中、すぐに挿入って…♡」
「ぁんっ♡ もう～スイレン先輩濡れすぎ～♡ まぁ、あたしもだけどさ～」

ベッドに寝転がったままのリコが、唇を噛んで耐える私を見上げてせせら笑う。
やはりリコと同様に、ご主人様のモノを前に耐えられる訳がない。イカないように歯を食いしばっているのに、身体は貪欲に快楽を求めてしまう。

「これ、……ん、ぁっ♡ すぐにイク、かも知れません♡」
「え～♡ あたしのおつゆまみれのちんぽでもイッちゃうんだ～♡ スイレン先輩って実はむっつりスケベだったり？♡ あたしは、ご主人様だけにオープンどすけべだけど♡」
「わ、たしだって……っ♡ あ、んぁああっ♡」

違う、そう、でも。ご主人様に忠誠を誓った私が濡れるのは当たり前で。
ナマケモノのようにモゾモゾと起き上がるリコを尻目に、私を串刺しにしている肉の釘が抜き挿しを始める。
ガマンする決意は、一瞬で消し飛んでいた。
「ほらね」と後輩が笑って、冷たい顔で見下ろしている。ご主人様にそっと耳打ちする表情は、ひどく残酷だった。

「ねぇね、ご主人様♡ スイレン先輩のまんこ、あったかいですかぁ♡ あたしにもちんぽがあったら犯したいんですけど……♡」

ああ！犯してほしい。犯してくれ。ペニスバンドをつけて、喉奥が抉れるくらい、気持ちよくしてほしい。ご主人様に突かれながら、リコに喉を犯されれば、きっととんでもない快感に違いない。

「でもぉ、やっぱり女を犯すのは、逞しい男の人……♡ この素晴らしい組織を束ねるご主人様に犯してもらわないと……女の子は幸せにはなれないですよね♡」

ぱんぱんとちんぽに突かれて、犯されて、私はどこまでも幸せになっていく。襞でご主人様を擦って、膣を締めて、もっともっと気持ちよくなって。

「ふーっ、ふー……♡……ふふっ、お耳に息を吹きかけられるの、好きですか？ふー……♡ えへへ！ ではこんなのは、いかがですかぁ？……ぢゅぶ……ぢゅるるるぅ……ぢゅず、じゅぶぶる……♡」

リコ、ああっリコ♡ リコだいすき♡♡
ご主人様の性奴隷に洗脳されたリコが好き♡♡
ご主人様のお耳を舐めながら、自分でおっぱいを揉んでオナニーをしてるリコが大好き♡♡

「ごひゅじんひゃま……耳にゃめ……ちゅぷ……きもひいい？♡ じゅぱっ、くちゅ、ちゅぷ……ぢゅる……んっ♡ んんっ♡」

あっ♡ あっ♡ うぎ♡ ごしゅじんさまそこはダメです♡ 弱いところで♡♡
はい♡♡だまって犯されます♡♡ 私みたいなオナホまんこ♡♡犯されて当然です♡♡犯して♡♡犯し尽くして♡♡好きなだけお射精してください♡♡

「れぅ……ぁは……♡ ごひゅじんひゃまのちんぽ……また、おっきくなってますね……♡ スイレン先輩のまんこにお射精、しちゃうんですかぁ♡ ぢゅるるるっ、じゅぶ……ちゅぷ……♡ はぁ……っ♡」

ずぼずぼ♡ ちんぽすごい♡ ごしゅじんさまちんぽ♡♡ ぶっとくて♡♡ 最高れす♡♡はい♡ もう私のおまんこはご主人様のカタチになってます♡♡ ご主人様を迎え入れるためのちんぽケースです♡♡ あ♡あっ♡♡犯して♡ ずぼずぼって♡♡

「流石はご主人様れふ……♡ 女を犯すかっこいいちんぽ、おまんこズボズボしても、ずっと固いままのがちがちちんぽ……♡ ふれー、ふれー、ちんぽ♡ まんこに負けるなちんぽ♪ あは……っご主人様、びくってしましたね♡」

アタマトぶ♡♡ ごしゅじんしゃまに突かれて♡ アタマまたバカになる♡♡ 弱いところガン攻めの♡♡アクメまったなしのざこまんこ♡♡ あは♡ ぁへ♡ あ♡ イキ♡イキます♡ ご主人様より先にイッてごめんなしゃい♡♡

「ほら、イケ、イケ。いっちゃえ♡ 女なんて無力だってわからせる説教ちんぽで、スイレン先輩の子宮にザー汁ぶちまけちゃえ♡ いけ、いけ、イケ♡」

ザー汁来る♡クル♡♡来る♡♡♡ 犯されるしか生きてる意味のないスイレンのまんこ♡♡ またわからしゃれて♡ あ♡

あ♡ またトびました♡♡

「ほら、また精液あがってきた♡ びゅるびゅる、おまんこどろどろにしちゃう濃厚精液あがってきた♡ 犯せ～♡犯せ～♡犯せ犯せ犯せ♡ 猛烈レイプでぐちょぐちょまんこに精液出せ出せ♡ 洗脳されてあっさり正義の味方辞めたメスオナホやっつけろ～♡ オス様腰振り種付けプレスで、よわよわエージェントを屈服させちゃえ♡」

もうしてます♡♡ 悪の嚢バンザイ♡♡ごしゅじんさま万歳♡♡ 濃厚精子の種付けファックれ♡♡♡ もう何回も屈服して♡♡ 欲しがりまんこのよわよわエージェントになってます♡♡♡ ころして♡♡ ちんぽでまんこ突きころしてくらしゃい♡♡ご主人様っ♡♡

「ほら、イク。イクイク、もうイク、いっちゃうっ♡ 精液だしたいだしたいだしたいのっ♡ まんこの奥にびゅー♪びゅびゅーって♪ もう5秒も耐えられない……まんこ犯して、孕ませるの。5、4、3……きた、きた、2、きた！……1……！どぴゅ～、どぴゅどぴゅーーーっ……♡」

あ♡ ひ♡

一番奥深くまで挿さったモノから、火傷してしまいそうなほどあつい液体が吹き出してくる。ご主人様の子種がたっぷり入った精液が、私の体内も、脳の中もすべ

て犯して、更に書き換えていく。ご主人様への絶対的な忠誠心がますます深くなる。私は今日一番のオーガズムを感じながら、膣中に満たされていく精液を感じていた。

「あ……♡おふ……っ♡あ、ぁああ……」
「にへへ～っ♡ おつかれさま、ご主人様！ いっぱいいーっぱい、精液出してくれてありがとぉ♡」
「はぁ…っはぁ…んっ♡ 私からもお礼申しあげます……リコともども、犯していただき……はぁっ、ありがとうございました……♡」

ダメ押し気味に、ご主人様が引き抜いたモノを扱きあげ、私のラバースーツにかけてくださる。白くて濃厚な精液が、ゴムに包まれた私の身体に熱を与えてくれる。その神聖な白い液体を口へと運んだのは、ほとんど無意識だった。牡臭くも心の底から幸せになる、淫らな味がする。

「よかったね、スイレン先輩♪」
「あぁ、リコも、本当に良かった……私達……」
「うん、これからもずーっと一緒に、ご主人様と組織に忠誠を誓おうね♡」
「ああ。もちろん……んっ♡ はあぁ……♡」

何度も射精なさった後とは思えないほど粘ついた精液が、愛液と混ざり合っておまんこから垂れ落ちていく。
皺だらけのベッドシーツはすっかり濡れて、激しいセックスの跡がくっきりと残っている。今回は乾かすのが大変かも知れない。だけど、これは私達ご主人様の奴隷にとっては勲章にしかならない。

力強く突き上げられて、子宮の奥まで子種をねじ込まれて。
女の最も幸せな経験をくださった御方に、心の底から感謝を示さないと。
先にご主人様に抱きついたリコの真反対側に陣取り、あふれんばかりの愛を囁く。

「ご主人様ぁ…♡」
「私達、ご主人様に尽くします……♡」
「悪の嚢をもっともっと……大きくしましょ♡」

「もっともっと、組織の理念を世界に広めましょう♪」
「女は男に勝てないの♡」
「女の役目を、あるべき姿をもっともっと伝えていきましょう」
「女はみんなご主人様のちんぽケース♡」
「ご主人様はコレクションした女を選んで、その時の気分で犯すんです♪」
「男性に支配されることこそ、女にとって最高の幸せ♪」
「最高の名誉」
「他には何にもいらないの♡」
「「気の済むまで、女を犯すのは誰が見ても正しいこと……♡」」

だから、これからもご主人様を支えていこう。
いずれ組織が世界の思想を統一するその日まで、そして、それから先も。

「ですからご主人様……♡」

私とリコは組織を拡大し、女が真に果たすべき役割に目覚めるよう啓蒙し、布教し、教育する。女は淫らで、浅ましく、ご主人様に従うことこそ幸せなのだと。
考えを無理やり塗りつぶして、組織に都合のいい牝をつくりだすあの機械を使って、女に生涯消えない幸福の印を焼き付けて行こう。

「「また、そのとてもたくましいおちんぽで、私達おまんこエージェントを犯してください、ね……♡」」

私達は厳かな気持ちで誓いを立て、彼に唇を押し付けた。